

國學院大學學術情報リポジトリ

『駿河清重 伊達紙子笈捨松』における伝説の再生：
奥州白石噺と常陸坊海尊

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三田, 加奈, Mita, Kana メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000588 |

『駿河清重 伊達紙子笈捨松』における伝説の再生

— 奥州白石噺と常陸坊海尊 —

三田加奈

はじめに

江戸の十七世紀後半から幼童の娯楽のための絵本が出版され、表紙の色から赤本、黒本、青本と呼ばれた。それが十八世紀後半になると、一冊五丁が二、三冊の形の「絵入り小説」のスタイルとなり、婦女子層から大人向けの読者を対象とした「黄表紙」が生まれてくる。滑稽や風刺を基調とした「風俗、世相漫画」風で、現代の成人向け漫画雑誌や週刊誌のような役割を果たした。ただ、「黄表紙」と名付けたのは後世の草双紙の文

学史家で、当時は体裁が変わらないので青本と呼ばれていた。意味や価値の異なるものを連想させる「見立て」や、現実世界の情報や話題の裏側を暴いて見せる「うがち」の手法を用いて読者を楽しませる趣向のものが多く、水野稔によると「安永四年（一七七五）から文化三年（一八〇六）までに出版された黄表紙は二千種をこえる。」という。それほどに人気を博し、また手軽に購入されたのであろう。

江戸の後期に刊行された鳥居清経画・作の『駿河清重 伊達紙子笈捨松』（安永五／一七七六）を、ここでは取り上げる。鳥居清経は、鳥居派に属する絵師で、〈黒本・青本〉を多く手

がけ、黄表紙の制作にも携わっている。この作品は、黒本、青本、黄表紙のいずれに属するか判断が難しいが、島津久基は「黄表紙」に位置づけており、安永五年の出版物でやや大人向けと思われるので、本稿でも「黄表紙」に分類する。

この黄表紙は、源義経没後の平泉の藤原氏と鎌倉勢との文治五年奥州合戦を表向きにして、その裏に江戸の中期にあったとされる敵討を絡ませた物語構成である。義経を襲撃し、自害させた藤原泰衡とその重臣の金剛秀綱を、義経の雑色である駿河次郎清重が狙い、また一方で金剛秀綱を父の仇敵とする娘と協力し、ついに両者の仇討ちを成就させるという史実に似せたフィクションである。江戸の中頃、実際に宮城県白石市で起こったとされる敵討事件を取り込み、舞台を鎌倉時代の奥州を中心に仕立てている。

ところで、作品そのものは荒唐無稽であるが、作品構想になぜ義経が取り上げられるのか。それに、義経の家臣であった常陸坊海尊も残夢仙人として重要な役割を持って登場してくる。江戸期に義経やその家臣らが文芸作品に取り上げられることは、義経および海尊伝説を研究する立場からすると見逃すことができない。作品を通して見えてくる義経伝説やその伝承世界を、ここでは追究していくことにする。

本稿ではまず黄表紙『駿河清重 伊達紙子笈捨松』の内容を、順を追って説明し、続いて物語の背景にある史実や事件を関係づけて解説する。そして、作品が意図するテーマを確認しながら、駿河次郎清重、常陸坊海尊をめぐる伝説の時代的意義を明らかにするとともに、地域の伝説が江戸の文芸世界でどのような関心を持って受け入れられているのか、その実態について考察する。伝説を地域の信仰という側面からだけでなく、文芸というメディアにおける変容の問題としても追究していく。都市の消費社会における享受の一端として、その意義に触れながら伝説の変貌を明らかにしていきたい。

一 『駿河清重 伊達紙子笈捨松』の二つの敵討

鳥居清経は、江戸中期に活躍した鳥居清満の門人で、清長とともに名高い人物である。蝦夷開拓を熱心に取り組む田沼意次の時代を中心に活躍し、鳥居派が得意とした〈黒本・青本〉の流れを汲んでいる。清経は安永三年に『伊豆熱海温泉縁起』を画くなど、敵討に関心を寄せていたと考えられる。同じく敵討物である『駿河清重 伊達紙子笈捨松』は、三冊の全十五丁の体裁で、「奥州白石噺」に着想を得た作品である。以下にその

あらずしをあげる。

源義経が高館で自害した後、奥州平泉の藤原泰衡兄弟が今後の戦の評議をするが、その仲立ちの中心は泰衡の重臣金剛秀綱（もとは秀衡の重臣）である〔二丁表〕。いつになく泰衡が心地悪く思ったことから、秀綱とその従者平馬が塩釜明神に代参に出かける。そこで、しおやき平作（実は義経の郎党）の娘おそのを見初め、恋慕の心を抱く〔一丁裏・二丁表〕。娘を手に入れようとあれこれ画策するが、ついに平作を責め殺害する〔二丁裏・三丁表〕。秀綱に父を殺されたおそのは、仇討ちすることを心に決め、金龍軒と名乗る駿河清重の屋敷の門をたたき、剣術の指南を依頼する〔三丁裏・四丁表〕。

そのころ、泰衡はさまざまな怪異に悩まされ続ける。兄の国衡が宿直していると、泰衡と小鬼の間答する様子を笑見する〔四丁裏・五丁表〕。

おそのは金龍軒によく仕え、剣術を学び、腕をみがく。そして、門弟の信夫の介まさはると出会う。まさはるはおそのの美しさに見惚れる〔五丁裏〕。

泰衡の屋敷には、妖怪の大腕が現れ、「不忠・不孝」となじる。泰衡および秀綱らは恐れ悩乱する〔六丁表〕。宿直の国衡が、

現れた妖怪を斬ったところ、火鉢が二つに割れ、画かれた力士が血に染まる〔六丁裏・七丁表〕。

おそのは敵討の秘密をまさはるに打ち明ける。一方、主君義経の仇である泰衡を討つことがいまだ叶わないことを金龍軒は嘆く〔七丁裏・八丁表〕。金龍軒はおそのとまさはるを近くに呼び、かつて義経の雑色駿河清重であったことを明かし、いまや年を老いて本意を遂げられない苦衷を吐露する。そして、おそのの狙う相手が主君義経の敵であるとして、金龍軒は鎌倉方の情報と刀を渡す。まさはるも義経の家来佐藤継信の子であることを打ち明ける〔八丁裏・九丁表〕。（筆者注）この部分は、三人の思惑が一致し、二つの敵討が結びついて泰衡、秀綱の殺害へと展開する分岐点である。

おそのとまさはるは身をやつして、阿津賀志山（厚樫山）の鎌倉勢の陣所に忍び込む。その場の雑兵に馳走し、畠山重忠の側近である半澤六郎に会わせてもらうように頼む〔九丁裏・十丁表〕。

半澤に敵討を申し出たところ快諾され、先に平泉に忍びこんで合図を待つようにいわれる〔十丁裏〕。おそのとまさはるは平泉に向かうが、道中の山中にておそのはまさはるとはぐれてしまう。その夜の夢に、残夢仙人が現れて「泰衡にさまざまな

怪異をもたらしたのは自分の通力である。また、親の敵である秀綱を討とうとするなら、通力でここに秀綱を連れてくるから、ここにいるように」と諭す「十一丁表」。

阿津賀志山合戦で平泉勢は破れ、国衡はどうかして平泉の弟泰衡のもとへ戻ろうとする途中、半澤六郎と出会い、相対する。そこにまさはるが助太刀に現れ、国衡を打ち取る「十一丁裏・十二丁表」。

一方、阿津賀志山合戦に負けたことを知った秀綱と平馬は、主君の泰衡と御台を裏切つて殺す「十二丁裏・十三丁表」。秀綱は、畠山の陣所に駆け込む山中で迷い、おそのとまさはるの二人に遭遇し、二人はみごとと仇討ちを成し遂げる。背後で、残夢が通力で加勢する「十三丁裏・十四丁表」。

無事に本懐を成し遂げたおその夫妻は、畠山のもとへ報告に行く。畠山は鎌倉にこの手柄を鎌倉殿に報告することを約束する「十四丁裏・十五丁表」。

結末は祝儀。残夢と駿河清重の久々の対面で締めくくる。残夢は常陸坊海尊であることを名乗り、義経が蝦夷の大王として君臨していることを伝える。駿河清重は、仇討ちが果たされたことと義経の活躍を聞いて喜ぶ「十五丁裏」。

登場人物表

| | 登場人物 | 実像、人物関係 |
|-----|-----------|-------------|
| 義経方 | 金龍軒 | 実は駿河清重 |
| | 平作 | 義経の郎等 |
| | おその | 平作の娘 |
| | 信夫の介まさはる | 佐藤継信の子 |
| | 残夢仙人 | 実は常陸坊海尊* |
| 藤原方 | 錦戸太郎国衡 | 藤原秀衡の長男 |
| | 伊達次郎泰衡 | 藤原秀衡の次男(嫡男) |
| | 金剛別当秀綱 | 秀衡・泰衡の家臣 |
| | 松ざき平馬是くに | 秀綱の部下 |
| | 泰衡御台 | — |
| 鎌倉方 | 畠山重忠(秩父殿) | 頼朝の重臣 |
| | 半澤六郎 | 重忠の部下 |
| | (鎌倉殿) | 源頼朝 |

*常陸坊海尊。物語では「ひたちぼうかいぞん」と表記される。

高館合戦以後の、源頼朝が率いる鎌倉勢と奥州藤原氏の平泉勢との文治五年奥州合戦を話題にした物語であることは一目瞭然で、最後に義経の蝦夷地の王のことまで触れている。次にその「登場人物表」を載せる。登場人物と、その実像や人物関係を示したものである。続いての二章では、この物語の中心にあ

る敵討事件の主人公・駿河次郎清重の人物造型と、事件の歴史的背景およびその伝説についてみていきたい。

二 駿河清重と義経伝説

外題(タイトル)にみられる人物の「駿河清重」は、『義経記』では源義経の雑色として、ほんの一部に登場するだけである。また、その記事に基づいたと思われる幸若舞『清重』でも義経の郎等として出てくるが、その存在感は薄い。『吾妻鑑』でも名前が確認できないことから、実在の人物であるかさえ怪しい。その駿河清重が、義経四天王の一人となっていくのは、後世の演劇等の宣揚によるものである。駿河清重の唯一の動向は、『義経記』巻八「秀衡が子共判官殿に謀反の事」に、次のように描かれている。

これを見て、兄の錦戸、従兄の樋爪五郎、弟の元吉の冠者、この事人の上ならずとて、各々心々になりにけり。六親不和にして、三寶の加護なし。しかも思へばあきぢかなり。判官も「さては義経を思ひかくらん」とて、武蔵坊を召して、珍しく文をぞ書かせられける。「筑紫は菊池、原田、

白杵、緒方、急ぎ参れ。仰せ合はすべき事あり」とて、雑色駿河二郎に賜ぶ。次郎夜を日に為して京上りして、筑紫へ下らんとしけるが、いかなる人か申しけん、六波羅へ聞こえ、下部廿余人差し遣はして駿河二郎を召し捕り、関東へ下されけり。〔義経記〕巻八「秀衡が子共判官殿に謀反の事」⁽²⁾

藤原一族が一致団結しないことを憂慮して、義経は援軍の要請を駿河二郎(または次郎。駿河清重のこと)に依頼をする。筑紫へ向かう途中で六波羅に捕まり、鎌倉の頼朝のもとに送られるが、以後の記述は『義経記』には見受けられない。この『義経記』に続くと思われる展開が幸若舞の『清重』である。伊勢三郎義盛と行動を共にするのだが、『舞の本』の解題に「義盛に比べて清重登場の場はなく、本話はその場を与えたものか」⁽³⁾と記されるほど、駿河清重の登場は限定的である。義経の命を受けた義盛と清重が山伏姿にやつして諸国をめぐるが、清重はこの機会に鎌倉見物を思い立ち、いずれ落ち合うことを義盛と約束して別れ、一人鎌倉入りする。それが命運を決することとなり、帰途の片瀬川で梶原景季に見咎められ、自害する結末となる。『義経記』では六波羅に捕まってから鎌倉へ送還される

のに対し、『清重』では景季に片瀬川で見つかり捕らえられる。清重の囚われ方に違いはあるが、その最期を鎌倉とする点では両者とも一致している。

『清重』で、景季に見つかったとされる「片瀬川」は、鎌倉の出入り口に位置する「片瀬村」近くの川のことである。徳川光圀が鎌倉を現地調査した際にまとめた『鎌倉日記』（延宝二年／一六七四）によれば、次のように記される。

笈焼松 片瀬村ヨリ南へ行道アリ。此所ヨリ出 六町程ユ
キテ在家ノ後ロノ竹藪ノ際ニアリトナン。駿河次郎清重ガ
笈ヲ焼シ所ナリト云。⁵⁾

片瀬村より、南へ行く道を出て、六町ほどいった先の民家の裏に、駿河清重の笈を焼いた場所があり、そこを「笈焼松」と呼ぶという伝説となっている。この場所、なぜ駿河清重が笈を焼いたのかは、具体的に説明されていない。前後するが、前述の幸若舞の『清重』には、景季に見つけられた清重の状況が描かれる。

源太、目早き男にて、「こ、を通る山伏の、河風に笠を取

られしが、額を見れば、月代の白く見えつる怪しさよ。山伏ならば通すべし。様あらば、召し捕れ」とて、駆け足速き駒共に、面／＼に鞭を採み添へ／＼、「いかに、こ、もとを通り給ふ山伏に、物申さん」と言ふま、に、我も／＼と追つ掛くる。清重、これを見て、「一足なりとも、弓取の敵に後ろを見する事、不覚の至」と存ずれ共、君の御判と、国々の人々のお請けの判共の、顕れむずる悲しさに、耳にも更に聞き入ず、五町ばかり行き過ぎ、小高き所に走り上がつて、笈をひつたと下ろし、笈の肩箱よりも、火打ち、付け竹取り出し、ちやう／＼ど打ち付け、御判とお請けの判どもを、利那に焼ひて捨てたりしは、剛成ゆへの早業かなと、誉めぬ人こそなかりけれ。

景季（源太）の郎等に追われる清重が、逃亡の途中で、義経の廻文や国々の御判など、嫌疑の対象となる笈の中身を小高き所に上がつて即座に燃やし捨てたという場面が展開される。「廻文」は、江戸期の俳諧の付合語集である『俳諧類船集』（高瀬梅盛）に、「伊勢三郎駿河二郎山伏の姿にてありきしも運の尽たるは是非なし」として、幸若舞『清重』を踏まえて取り上げられる。⁶⁾ 俳諧の付合語になるほど『清重』の物語は広く知られ

ていたことが伺える。

ところで、この『鎌倉日記』の記事は、水戸光圀が河井恒久に命じて編纂した『新編鎌倉志』（貞享二年／一六八五）にも多数引用されており、その巻六に、

笈焼松 笈焼松は、片瀬村の西の方、民家の後竹藪アシダの際にあり。駿河次郎清重、笈焼し所なりと云ふ。



※河井恒久友水『新編鎌倉志』八卷「三」（国立国会図書館デジタルコレクション ndjip_pid/2608365）

「固瀬村」（片瀬村のこと）の西方の駿河次郎清重が笈を焼いた場所「清重笈焼松」として絵図（前図）に描かれる。『駿河清重 伊達紙子笈捨松』が世に著わされた後も、江戸隠士葛郞の『山東遊覧志』（安永八年／一七七九）や、植田孟縉の『鎌倉攪勝考』（文政十二年／一八二九）には『新編鎌倉志』の記事が引用されて、片瀬村の「西寄」にあると記されている。その後の林述齋の『新編相模国風土記稿』（天保十二年／一八四一）の鎌倉郡巻三七には、「清重笈焼松 大磯古道の北側にあり、義経の郎等駿河次郎清重樹下にて笈を焼捨、戦死せし舊蹟と傳ふ」とあり、大磯道を起点に道を古道と記して北側にあると添えている。加えて清重の「戦死せし」旧跡として、『山東遊覧志』と同様に伝説の様相を明らかにしている。

鳥居清経「駿河清重 伊達紙子笈捨松」の「笈捨松」は、「笈焼松」の言い伝えを振ったものであろう。外題は幸若舞「清重」や『新編鎌倉志』の記事および伝説を受けて命名されたと思われる。源氏を崇敬する徳川光圀によって鎌倉には古都の価値が与えられ、そのうちいくつかの場所は伝説の現場と位置付けら

れて、『觀光名所』として整備されていった。そのことは、押田佳子「鎌倉における伝統的な「古都観光」の継承に関する研究」でも指摘される。駿河清重の事跡は、その後の『相模國風土記稿』などからもわかるように、鎌倉の名所旧跡として江戸庶民にも浸透していたと考えられることから、「笈捨松」は恰好の外題として取り込まれたと考えられる。

続いて「駿河清重」と「笈捨松」の間に置かれる「伊達紙子」とは何を意味するものか。「伊達」とは、いうまでもなく「仙台藩」の伊達一族のことである。紙子は、文字通り紙で作った衣服のことであるが、文芸世界では貧しさや零落した身の上を表現するための寓意に用いられる。上方歌舞伎などでは金持ちの息子が放蕩の果てに一文無しになってやつれた姿をあらわす言葉として、しばしば使われる。ただ、ここではもう一つの敵討事件である伊達の白石領の百姓娘が身をやつして本懐を遂げた出来事を暗に示している。それについて、次章で詳しく取り上げる。

三 「奥州白石噺」の経緯

鳥居清経のこの黄表紙について、「はじめに」で義経没後の

奥州合戦を表向きの時代設定とするが、その中に江戸の中期に起こった敵討事件を取り込み、重層的な作品に仕立てていると述べた。いわゆる「見立て」の構想を用いての作品形成である。その敵討事件の経緯について、次の「奥州白石噺」関係年表」をもとに概要を確認しておきたい。

◇「奥州白石噺」関係年表

一六五一（慶安四）

慶安の変 由井正雪は自害する

一七一〇（宝永七）前後

実録『油井根元記』（由井根元記）が書かれる（宝永七写・

天理大学附属天理図書館蔵）

一七二三（享保八）

『月堂見聞集』に姉妹による敵討のことが記される（注）

一七五七（宝暦七）前後

実録『慶安太平記』が書かれる（宝暦七写・東京大学蔵）

一七七六（安永五）

黄表紙『駿河清重伊達紙子笈捨松』が出版される

一七八〇（安永九）

浄瑠璃『碁太平記白石噺』が上演される

一七九五（寛政七）

歌舞伎『姉妹あねむすめ達大磯』が上演される

（注）白石市の八枚田の孝子堂にまつわる由来伝説では、寛永十七年（一六四〇）に姉妹による敵討が行われたとあるが、後に触れることにする。

「奥州白石噺」とは、仙台藩士による百姓斬り捨て事件に対し、百姓の娘二人が公儀に訴え、敵討の許諾を得て、みごと本懐を遂げるというものである。江戸中期に書かれた『月堂見聞集』巻十五の享保八年の記事に「仙台より寫来候敵討之事」として事件のことが記される。以下にその概要を記す。

享保三戌年（一七一八）の事、伊達藩の松平陸奥守（伊達吉村）の家老片倉小十郎の知行地の白石にて、現在の宮城県柴田郡村田町にあたる足立村の百姓四郎左衛門が田植えをしている所に、片倉小十郎の剣術師範役の田邊志摩が供を連れて通りかかった。その路地で四郎左衛門の娘が投げた苗が田邊志摩の衣服に掛かってしまう。謝る四郎左衛門と口論となり、憤った志摩は百姓四郎左衛門を無礼討ちにした。これを見ていた二人の姉妹の姉すみは十一歳、妹たかは八歳で、いったんはその場を逃げ去る。やがて二人は実家を出て仙台に移り、陸奥守の剣術

師範の瀧本伝八郎のもとへ奉公する。六年の間、ひそかに剣術を習っていたが、不審に思った瀧本に事情を聞かれ、一部始終を明らかにする。瀧本は感心し剣術の秘伝を教えたという。この頃、瀧本は貳千石を与えられ、名を土佐と改める。陸奥守の取り計らいで、享保八年四月に宮の町の白鳥大明神の社の前に矢来を結び、二人の娘による田邊志摩への敵討が行われ、無事に父の仇をとったという。褒美を言い渡されるが、娘らは固く辞退したとある。

この記事の最後に「右之書付実否之義不存候得共、仙臺より寫参候由、世間風説在之故留置候、以上⁽¹⁾」とあり、事実として確認された「書付」ではないが、巷説もあるゆえにと作者の本島知辰は記す。後に芸能や読物などに書かれ、また民衆の間に広く伝わっていく背景を、茶谷一六は「武士の不当な仕打ちに対する百姓娘の正義の闘争⁽²⁾」といった明確な主題が共感と感動を与えてくれたからと評しているのは尤もである。

ところで、この話における剣術指南役が、仙台の瀧本伝八郎から由比正雪にとつて代わるのが、『月堂見聞集』が書かれた約三十年後の実録『慶安太平記』⁽³⁾である。『慶安太平記』とは、江戸の前期に世間を大きく騒がした由井正雪の乱（慶安の変）の始終を書いた読物で、先行する実録『由井根元記』（油井根

人物対照表

| 黄表紙 | 月堂見聞集 | 慶安太平記 |
|----------|-------|--------|
| 金龍軒 | 瀧本平八郎 | 由比正雪 |
| 平作 | 四郎左衛門 | 與太郎 |
| 平作娘おその | 姉 | 宮城野 |
| 信夫の介まさはる | 妹 | 忍 (信夫) |

元記)をもとにしている。「由井根元記」は敵討事件の十年以上も前のことであり、当然ながら敵討の記事はないが、後に事件を『慶安太平記』に取り込み物語構成したものである。

この『慶安太平記』をもとにしながら「奥州白石噺」を義経物へと一転させたのが、鳥居清経の黄表紙『駿河清重 伊達紙子笈捨松』と思われる。ここでは父平作を殺されたおそのが、仇討ちのために剣術師範の金龍軒(実は駿河清重)に弟子入りし、同じ子弟の信夫の介のまさはる(実は義経の忠臣佐藤継信の子)と夫婦となつて、父の敵討を成就する。夫の名前の信夫

は、出身地の信夫郡から付けるが、実は『慶安太平記』における姉妹の名を姉が宮城野、妹を忍(信夫)とするのに符丁を合わせ、読者にほのめかす。

「奥州白石噺」はその後も黄表紙などに取り込まれ出版されるが、安永九年(一七八〇)には浄瑠璃『基太平記 白石噺』として竹本座で上演され、さらに歌舞伎「姉妹達大磯」にも作られる。江戸後期の狂歌師である大田南畝が「宮城野忍報讐の実説(『一話一言』)

という記事を、前述の『月堂見聞集』の内容を引き、「世に謂わゆる宮城野忍の事なるべし」として世間話の実態を紹介している。標題の「宮城野忍報讐の実説」は、太田貞水の「由井正雪」(『講談全集』第十一卷、昭和四年)の一席にも「實説宮城野信夫」とあり、由井正雪の事件と関わって長く芸能の世界で親しまれてきた。

ところで、前章の最後に黄表紙の外題の「紙子」の意味に触れたことについて、ここで再び取り上げる。黄表紙が外題につけた「伊達紙子」とは、「奥州白石噺」を暗に示していることは触れたが、そのことは伊達の白石は江戸時代に紙の生産地であったことと関係しているからである。仙台藩がまとめた『封内風土記』巻七の「白石本郷」に「紙衣紙布」が白石の名産とある。仙台藩の地誌『奥羽観蹟聞老志』にもその記事があり、また寛政期にここを旅していった古川古松軒も『東遊雜記』で、白石の紙について取り上げている。仙台藩の白石領は、福島県の信夫郡とも接した地で古くから紙の名産地であり、広く知られていたのである。『駿河清重 伊達紙子笈捨松』の外題には、仙台藩内の白石領で起きた仇討ち事件が紙の産地であったこと、百姓娘が「紙子」のように身をやつして敵討を成就したことに掛けて用いていたことがわかる。

なお、補足するならば、現在の白石市大鷹沢三沢八枚田には、大正十五年に「孝子堂」が建立され、静岡市の来迎院から仏像を貰い受け、姉妹の孝義を顕彰している。また、明治・大正以降、地元では寛永十三年、八枚田で百姓与太郎が白石城下の剣道指南浪人志賀団七に殺害されたことを歴史的事実とみなしている。与太郎が謝罪した「膝折橋」、殺害された「手討の森」、寛永十七年に姉妹が敵討したという場所「六本松河原」を史跡化し整備をすすめている。筆者は確認していないが、これらに關係する資料「孝子堂の由来」等を専念寺が保管しているという。

四 義経伝説と常陸坊海尊

ここまでは黄表紙『駿河清重 伊達紙子笈捨松』の内容を、登場人物や作品の構想に利用した敵討事件などを取り上げて、作品の形成過程について論じてきた。本稿は黄表紙を話題に取り上げているが、筆者の目的は作品研究そのものではなく、作品のモチーフに使われた義経やその家来の動向にある。黄表紙の中に義経主従の伝説がどのように反映されているのか、その問題を究めることにある。次に、その中心となる奥州合戦をめ

ぐる人物群と、その中の常陸坊海尊に焦点を当てて考察を加えていきたい。

島津久基の『義経伝説と文学』によれば、江戸時代は義経伝説の最盛期であるという。演劇を始め文芸や民間説話など、多種多様な義経伝説が発生する。黄表紙『駿河清重 伊達紙子笈捨松』もその一つで、新たな義経物の作品形成といえる。主人公の駿河清重は、『義経記』等において義経従者の末席の雑色にすぎないが、鎌倉片瀬村に「笈焼松」の伝説を刻んだ人物であることは、二章で述べた。この伝説の創出、あるいは喧伝に徳川光圀が関わる『鎌倉日記』や『新編鎌倉志』が関与していたことについても指摘した。

徳川幕府は自らの政権の正統性を武家の本流である源氏に求め、これとの関わりを政策的に推し進めた。こうした幕府の動きは江戸の中期以降に顕著となっていく。そのことは義経伝説および義経蝦夷渡航を肯定、評価する方向と無縁ではないだろう。幕政の中核にいた新井白石は『蝦夷志』を書き上げ、アイヌが義経を信奉していることを記している。

幕府が伝説を歴史に格上げするような形の「伝説操作」が、庶民に影響を与えないはずはなく、江戸における義経文芸の隆盛はこの幕府の方向性と軌を一にしている。江戸中期以後の東

北の地において書かれる『清悦物語』や『鬼三太残齡記』は、こうした時代の動向と合わせて捉える必要がある。黄表紙の『駿河清重 伊達紙子笈捨松』は、江戸で出版されたものであるが、義経没後の奥州合戦を舞台にした作品構成であり、「判官びいき」の読者の興味を十分に意識したものと見える。

ところで、駿河次郎清重以外の登場人物にも触れておく。『駿河清重 伊達紙子笈捨松』の舞台は現在の国見峠付近にある厚樫山周辺、阿津賀志山合戦や大木戸合戦で、奥州藤原氏が滅びるきっかけとなった文治五年の「奥州合戦」を基にしており、史実の上では藤原氏の重臣の金剛秀綱は、その子の下須房太郎秀方とともに戦いの先陣にいた。『吾妻鑑』の文治五年八月七日の条によると、藤原泰衡の兄の「西木戸太郎国衡」のもとで、奮戦したことが確認できる。また、同じ頃に鎌倉勢の常陸入道念西らと、平泉勢の信夫佐藤庄司らによる石那坂の戦いが行われている。『駿河清重 伊達紙子笈捨松』の登場人物は、そうした平泉勢と鎌倉勢との戦いの中で活躍した人物たちである。

そのうち悪役の金剛秀綱は、主君の藤原泰衡夫婦を刺殺し、鎌倉勢に取り入ろうと画策するところで、おその夫婦の敵討にあつて殺害される。しかし、史実の金剛秀綱は泰衡を裏切るどころか、忠義を尽くした人物である。『清悦物語』等で泰衡を

裏切る河田次郎のように、逆賊的なイメージを創り出したのは、この黄表紙の独自性といえる。こうした史実と異なる意外性の展開は、近松門左衛門の人形浄瑠璃『傾城島原蛙合戦』にも見られる。

寛永十四年の切支丹一揆に端を発する「島原の乱」の中心人物「天草四郎」を、作者の近松は、義経の家来である常陸海尊から仙術を受けた藤原秀衡の四男、四郎高衡に見立てている。奥州合戦での鎌倉方葛西清重に攻められたところを、妖術を使って逃げ失せる。その後、京都で青物売りの「七草四郎」となる形で展開していく。この作品を基にした黒本『新板蛙合戦 ちづくし』（出版年不明、関西大学図書館蔵）が出るなど、先行する芝居や作品を最大限に活用していく。歴史や事件を芝居化したものをさらに取り込み、娯楽として享受していたのが、当時の江戸の演劇、出版業界であったことを確認する必要がある。

一方、これも荒唐無稽といえるが「奥州白石噺」を取り上げた『慶安太平記』に、常陸坊海尊に関わる興味深い記事がある。

「正雪浪士と師弟の契約を為す事并正雪奥州へ赴く事」に、平泉の老人清悦が登場する。

武者修行で諸国を遍歴していた正雪は、越後を経て出羽の秋

田津軽南部をめぐり、奥州衣川にある中尊寺の山中にたどり着く。そこに寂れた庵があつて、中より優しき琴の音が聞こえてきたのを不思議に思い、声をかけて一晚の宿を乞う。年頃四十路の男が招き入れるが、そこには六韜三略が置いてあつて、弁舌滔々と水に流れるように講ずる様子にゆかしく思つた正雪は、「誰に随ひ斯の如く軍法を學び得給ひしぞ」と尋ねる。すると、男は「我は生國備中にて伊達洞白と云ふ者なり、軍法は江戸表にて楠不傳と云ふに随ひ學ぶ事八ヶ年、未だ其理を究めず、我浮世の名利を貪る事を欲せず、依て此山中に閑居して、年月を消光所むくろとらに、八句計りの老翁来り給ふ、其名を問へば清悦と答ふ、夫より其異人に随従ひて此書を學ぶに、其理顯然として分明なり」と返答する。正雪は「楠不傳」と「清悦」の名を知ることになり、「清悦」との対面を希望する。洞白は清悦が来るまでの間、正雪の逗留を許した。次の引用は、清悦が洞白のもとを訪れる場面である。

一日山の彼方に笛の音聞えければ、洞白申は「那笛の音杜異人の来り給ふなれ」と其身沐浴して衣服を改め、外に出て異人を迎ふ、民部は奈何成る人やらんと、柴の戸の蔭より覗き視るに、暫く有りて異人は黒き牛に騎りて頭に白髪

を垂れ面は美玉の如く、麻の衣を着し、悠々然と来る容體、寔とに凡ならず、洞白謹んで「先生何事有りて歟頃日は来臨し給はざる、先此方へ」と言へば、清悦庵の裡を吃度視て「不思議や汝が庵の上に不浄の氣有り、是正敷天下を闢ふ逆賊を泊め置きたるべし、是甚だ家の穢成れば、速く渠を追出せよ、然らずは向後汝に見ゆべからず」と言捨て牛を牽きて歸りけり、正雪は是を聞き大に驚愕、惣身に冷汗を流し、黙然として居たりけり¹⁵。

民部（民部之助）とは正雪のことで、後日、正雪は「楠不傳」に入門し、一門のものを唆して乗っ取ることになるのだが、この安からぬ正雪の思惑や企みを見抜く洞白の師・異人清悦は、『慶安太平記』ならではの異能の持ち主とされている。「異人は黒き牛に騎りて」という描写は、『太平記』や黒本『楠一代記』にみえる楠正成の「頭ノ七アル牛ニゾ乗リタリケル」¹⁶を想起させる。この不思議な老人こと清悦は正雪に会うことなく、むしろ天下の逆賊となる正雪を留め置く洞白を非難して帰つてしまふ。正雪は、心の内を清悦に知られて赤面し、その場を立ち去ることになる。『慶安太平記』では、清悦について次のように補足する。

此清悦は源義経公の臣常陸坊海尊、衣川没落後深山に分入り、終に仙人となりて、此時代迄も存命在りしと云ふ、又義経公一世の事を記し、是を清悦記と號け伊達正宗候の寶物となり、今に伊達家に傳來すと云ふ

常陸坊海尊が仙人となり、清悦と名乗ったことを記す「清悦記」とは『清悦物語』のことで、東北中心に流布した写本である。伊達家村田氏の御曹司右衛門大夫の小姓小野太左衛門が劍術の師・清悦との問答を聞きし書とされる。清悦は、義経が存命の頃に衣川のほとりで見知らぬ山伏に出会い、そこで饗応された「にんかん」を食して長寿を得たと伝えられ、常陸坊海尊と並記される。

民間伝承では、宮城県の青麻神社や岩手県の門崎の清悦墳、下北半島の海尊社¹⁸⁾などの例があり、清悦は常陸坊海尊と同一人物として伝説世界に現れる。こうした伝承は修験をはじめとした宗教者によって語られてきたことが分かっている。宮城県の白石市には「白石翁」という阿子鳥家に寄寓する謎の老人が、清悦や常陸坊海尊と同等の人物として描かれているが、これには仙台藩の儒学者の遊佐木斎の関与がある。林羅山や山崎闇斎などの儒学者が海尊伝説の形成に関わっていたことも明らかで

ある。

東北の地における信仰と緇い交ぜにある伝承世界の常陸坊海尊は、江戸の文芸世界では大きく変貌する。怪異的な常陸坊海尊は、江戸初期の幕府儒官の林羅山の『本朝神社考』の記事によって早くに記録され、常陸坊海尊¹⁹⁾残夢説が広く知られる。

『慶安太平記』に描かれる清悦像もその系列にあり、在地の物語に沿いながらも独自の展開を見せ、清悦は仙人そのものとして描かれ、由井正雪を批判している点も幕府の方針と一致する。

『駿河清重 伊達紙子笈捨松』に登場する残夢(海尊)は、駿河清重やおそのをバックアップする形で、場面の重要な要素に妖術を用いて援護する形で物語展開に関わる。いうなら「狂言回し」を演じる立ち位置で、物語をリードする役割を果たしている。歴史的、伝説的人物を越えた現実世界の枠内の存在となっている。

義経伝説の中では、こうした人物は海尊以外には見当たらない。弁慶を始めとした家来は『義経記』に見られる事跡の延長上に伝説化されているが、海尊だけは大きく逸脱している。蝦夷地に渡った義経が大陸のジンギスカンとなる荒唐無稽の伝説化同様に、江戸文芸等の海尊は妖術の仙人に仕立てられている。何が海尊を変えてしまったのか、江戸の庶民文化の問題として

追究していく必要がある。

近松門左衛門から草双紙に至るまでの常陸坊海尊像を追っていくと、天草四郎を助けたり、奥州白石事件の娘を救済したりするなど、弱者を保護し、救う形で活躍する。要するに、常陸坊海尊は文芸の世界において、不合理な状況におかれる庶民に味方をするヒーロー的な役割として登場する。在地の義経伝説からは随分と変貌した人物像といえる。伝説として素朴に崇められる存在から、エンターテインメント性を獲得した人気を博するようにキャラクター化し、江戸の庶民の娯楽の世界に取り込まれていることを確認しておく必要があるだろう。

おわりに

江戸期の義経物はあまりに多種多様で、その全貌を把握することは難しい。島津久基の『義経伝説と文学』は、その全貌の解明へと向けた労苦の賜物である。そこに本稿が取り上げた黄表紙『駿河清重 伊達紙子笈捨松』が少しばかり紹介されている。しかし、翻刻されたものもなく、本稿は黄表紙の絵と文字との格闘から始まり、ようやく作品研究へと及び、幾分ながらも問題点を絞ることができたところといえる。

その一つとして、まずは主人公の雑色の駿河清重である。佐藤兄弟や鈴木兄弟のような著名な家臣としての存在とは異なり、東北に残る写本『鬼三太残齡記』に登場する雑色の喜三太に似せたような脇役に設定するあたり、江戸の文芸世界に新たな主人公が義経物の需用に求められていたといえる。徳川幕府の源氏や義経びいきの文化状況が、こうした人物にもスポットが当てられたのであろう。

次に、『駿河清重 伊達紙子笈捨松』という黄表紙は義経伝説に寄り添いながらも、江戸で起こった「奥州白石斬」というトピックスを取り込んだところに、時代の作品の意図があった。強固な身分的ヒエラルヒーの世界で、百姓娘の敵討という事件に拍手喝采を見込んだところに、江戸の庶民の生々しい姿とその世界が息づいている。

その作品の物語構想に、近松門左衛門の『傾城島原蛙合戦』にみられる芝居の手法が利用されている。近松の描く常陸坊海尊像は、「七草四郎」（天草四郎）を助ける存在となっているが、『駿河清重 伊達紙子笈捨松』では、悪役の藤原泰衡を妖魔で悩ませ、またその家来の金剛秀綱に制裁を加える。義経の助勢が叶わなかったことを悔いる駿河清重に加勢し、清重と同じ敵手を共有するおそれに、残夢が通力をもって加担する。こう

した海尊／残夢像は、東北地方の伝説には見られなかったものである。

一方で、『慶安太平記』に登場する清悦像も、これまでのイメージを変えるものであった。『清悦物語』を模倣した在地の写本『鬼三太残齡記』には、義経を裏切った常陸坊海尊を非難すると同時に、後悔懺悔しながら余生を過ごす常陸坊海尊を褒める清悦もいる。しかし、『慶安太平記』の清悦は、逆賊の精神をもつ由井正雪を暗にたしなめるといった新しい姿、性格が付与されている。

東北の地の常陸坊海尊は、修験の活動と結びつき、またアンバ信仰に見られる靈験あらたかな存在として、宗教的な要素を帯びていた。その一方で、儒学者たちが目指した仙人像としての海尊の形成もあった。しかし、江戸の文芸に登場する変幻自在の常陸坊海尊は、江戸文芸が求める正義の味方のキャラクターとして造型されている。幕藩の体制や武士の不当な仕打ちに対する庶民の不満や鬱憤を、江戸の消費社会は庶民のさまざまなしからみから解放する物語世界を、妖怪・怪異を演じる役割を海尊に託して再創造したものといえる。

参考文献

- 麻原美子・北原保雄「解説」『舞の本』（新日本古典文学大系五九）岩波書店一九九四
- 新井白石「著」原田信男「校注」『蝦夷志南島志』（東洋文庫〇〇）平凡社二〇一五
- 梶原正昭『義経記』（新編日本文学全集六二）小学館二〇〇〇
- 鎌倉市市史編さん委員会「編」『大日本地誌大系』第五冊 大日本地誌大系刊行会一九一五
- 木村八重子「草双紙の世界 江戸の出版文化」ベリかん社二〇〇九
- 島津久基『義経伝説と文学』明治書院一九三五
- 鳥越文蔵「ほか」『浄瑠璃集』（新編日本文学全集七七）小学館二〇〇二
- 水野稔「黄表紙・洒落本の世界」（岩波新書〇〇）岩波書店一九七六
- 原田信男「義経伝説と為朝伝説 日本史の北と南」（岩波新書）岩波書店二〇一七
- 早稲田大学出版部「編」『近世實録全書』第十二巻一九二九

注

- (1) 島津久基「常陸坊海尊附残夢仙人」『義経伝説と文学』明治書院一九三五
- (2) 梶原正昭『義経記』（新編日本文学全集六二）小学館二〇〇〇
- (3) 麻原美子・北原保雄「校注」『清重』『舞の本』（新日本古典文学大系五九）岩波書店一九九四
- (4) 幸若舞『清重』では、六波羅に捕らわれるのは、伊勢三郎義盛とつながっている。
- (5) 徳川光圀「鎌倉日記」（延宝二年）鎌倉市市史編さん委員会『鎌倉市

- 史近世近代紀行地誌編』吉川弘文館 一九八五
- (6) 麻原美子・北原保雄「校注」『解説』『舞の本』（新日本古典文学大系 五九）岩波書店 一九九四
- (7) 河井恒久「ほか」『新編鎌倉志』『大日本地誌大系』第五冊 大日本地誌大系刊行会 一九一五
- (8) 植田孟縉「鎌倉攬勝考」『大日本地誌大系』第五冊 大日本地誌大系刊行会 一九一五
- (9) 林述斎「新編相模國風土記稿」（天保十二年）雄山閣編輯局「編」『大日本地誌大系』第四〇巻 雄山閣 一九三三—三三三
- (10) 「月堂見聞集 自卷十一 至卷廿九」『近世風俗見聞集』第二国書刊行会 一九二二
- (11) 「月堂見聞集 自卷十一 至卷廿九」『近世風俗見聞集』第二国書刊行会 一九二二
- (12) 茶谷一六「奥州白石嚙」の成立と展開』『東北民衆の闘いと文化』（民族芸術研究所研究二号）民族芸術研究所 一九七五
- (13) 『慶安太平記』（早稲田大學出版部「編」『近世實録全書』第十二巻に翻刻あり）によると、由井正雪は駿河国由井村の紺屋の倅富士太郎としての生立という。「駿河清重」の「駿河」は、ここから着想を得たのかもしれない。
- (14) 「孝子堂物語」『白石市史 3の(2) 特別史下の1』白石市 一九八四
- (15) 早稲田大學出版部「編」『慶安太平記』『近世實録全書』第十二巻 一九二九
- (16) 「大森彦七事」『太平記』巻二三（木村八重子「草双紙の世界」を参考）村田の御曹司とは伊達政宗の七男宗高のことを指し、柴田・刈田の領主である。
- (17) 拙稿「修験と儒学者の海尊伝説：下北半島および一東和尚をめぐる」『日本文学論究』七九号 二〇二〇
- (18) 拙稿「白石翁と海尊の長寿・仙人の碁」を視野に』『伝承文学研究』六八号 三弥井書店 二〇一九
- (19) 拙稿「白石翁と海尊の長寿・仙人の碁」を視野に』『伝承文学研究』六八号 三弥井書店 二〇一九